

## 西本博行さんの思い出

西本博行さんが2004年7月16日に亡くなられた。最近は交流が少なかったのに、突然の悲報であった。40年にわたる長い付き合いを思うと感無量である。私より5歳年下であったのに残念である。細かい記録を残していないので、正確でないことが多いと思うが、思い出を綴って見たい。

最初にお目にかかったのは、1960年代の初め、私が名古屋大学の助手をしていた頃で、理学部の6号館という、平屋建ての木造の建物へ来られた。そこには地球科学教室の地質学研究室があり、教授は竹原平一先生、助教授が森下 晶さんであった。構造地質学研究室の植村 武さん(当時助手、その後新潟大学教授、理学部長)が案内してくださったのだが、最初、植村さんを尋ねられて、化石のことなら糸魚川さんへということであったらしい。お話を聞いて、当時研究がすんだばかりの「瑞浪層群の古生態学的研究」(英文)の論文の別刷を差し上げた。

西本さんは岡山県玉島町(現在は倉敷市)のご出身で、広島大学の教育学部を卒業され、郷里近くの瀬戸内海の小島(岡山県北木島など)に赴任、教育に携わりながら、軟体動物(貝類)の採集をされており、広島大学付属臨海実験所(尾道市向島)の稲葉明彦教授に師事しておられた。

新生代の化石、とくに瀬戸内中新統産の化石を研究したくて、瑞浪に的を絞り、岐阜県の高校へ転任され、県立瑞浪高校の地学の先生になられたのである。そして、名古屋大学へ行けば何かわかるだろう、ということで私どもへの訪問となったのである。

それ以来、付き合いが始まった。現生の軟体動物の分類・生態に詳しく、特に瀬戸内海のそれについては、現場の経験から深い学識をもっておられた。話をしても、こちらがたじたじ、教わることが多かった。採集しておられた標本、とくに微小貝をたくさん頂いた。

こうした学問的なつきあいの後、1971年から中央自動車道の建設に伴う地質・化石調査、資料の採集が始まった。瑞浪市教育委員会に調査団が組織され、毎日の作業が始まった。



中央自動車道建設調査(1972年12月)

地元の方がたが採集・整理に当たられ、事務局担当は中村実さん(後に瑞浪市化石博物館長・経済部長)であった。西本さんは有力なメンバーの一人で、ほかに名大の柴田 博さん(名古屋大学名誉教授)・伊奈治行さん(前旭陵高校)、岡崎美彦さん(現いのちのたび博物館学芸員)らであった。西本さんの教え子で名古屋の会社に就職していた奥村好次さん(現博物館長)が西本さんの推薦で新規に採用されてメンバーに加わった。

軟体動物を中心に、各種の、保存のよい化石が採集され、興奮の日々が続いた。西本さんの学識と経験は十分に発揮され、多くの未知種の発見につながった。瑞浪市釜戸町の東端の工事現場でコハクが産出し、その中に昆虫化石が発見されたときは歓声が上がリ、祝杯をあげたものである。これらの成果は博物館を造ろうという動きに発展し、当時の渡辺遥三市長の英断で建設が進められた。豊富な資料は展示の基本となり、研究の成果がそこに盛り込まれた。西本さんを含めた当時の調査・研究チームの大きな成果である。そして、博物館は1974年5月に開館した。

一方、産出した各種の化石はそれぞれの専門家に研究を依頼し、調査の報告書とすると同時に、瑞浪市化石博物館研究報告の第1号となった。現在まで継続して発行されていて(2003年で30号)、世界的にも高い評価を受けている研究報告の原点はここにあり、西本さんも複数の論文に名前がある。

その後、私は1974~1975年にかけて、ヨーロッパへ在外研究に出かけたが、その後の博物館の運営、特に研究・教育普及については西本さんの絶大な協力があり後顧の憂いはなかった。西本さんは教育現場でも大きい力を発揮され、その個性は多くの生徒をひきつけた。クラブ活動はユニークでレベルが高く、瑞浪高校地質部の名は全国にとどろき、多くの学術的成果を生み出している。

初めは軟体動物にあった西本さんの興味はその後板鰓類に向かい、日本における研究に大きく貢献した。私も一緒に多少のお手伝いをしたが、たとえば、外国へ行く機会に是非ここへ行って欲しい、この人に来てきて、というわけで、標本を持参して意見を交換したことがある。オランダ・ライデン地質学鉱物学博物館(現自然史博物館)のVan den Boschさん、フランス・モンペリエ大学のCappetta博士である。こうした板鰓類の研究は化石博物館専報第5号(1985)にまとめられていて、当時のこの分野の研究の大きな成果となった。

軟体動物についても興味は継続していて、ある時期から鳥羽水族館におられた故大山 桂博士を訪問されて、意見を交換されており、その成果はいくつかの論文となっている。研究室へ出入りを許された数少ない人の一人であったのである。

西本さんの興味ははてしなく拡がり、私が知っているものだけでなく、*Acila*, *Dosinia*, *Ostreidae*, *Naticidae*, *Cancellaridae*などに及んでいる。いくつかは粗稿が残されているとのこと

で、いつか論文になることが期待される。西本さんの研究姿勢は資料収集に始まり、ひらめきが生まれ、作業仮説を立ててある結論に向かってまっしぐら、まわりを省みず進行するというタイプであった。このことによって多少の迷惑を受けられた方もあったかと思う。ただ、残念なことに、最後は放散 空中分解型になることが多かった(西本さんお許しを)。しかし、その発想はユニークで、切り口が鋭く、すばらしいものがあった。私との共著の論文にはむりやり祭り上げられて、私がまとめたものがある。最後の締めくくりができない西本さんの特性のなせることである。この、最後までしあげる能力を西本さんがもっておられたら、学位論文に相当するレベルの論文がいくつか出来上がっていたらと思う。天は二物を与えずとはこのことであろうか。

日常の西本さんはいささか桁外れのところがあつた。授業のある日に出てこられるので、聞くと、休みましたと平然としたものである。酒を愛され、若い頃は酒量も多かった。マージャン・碁もお上手で、中央道調査の頃はよく一緒に遊んだものである。

岡山県の笠岡近くの旧家から奥さんを迎えられ、一男二女をもうけられた。その笠岡のお宅へ伺い、泊めていただき、翌朝近くの沙美の浜で、希少種ヒロオビヨウバイがたくさん入った魚屑を安く入手し、大喜びをした思い出がある。思ったことをそのまま実行する方であつただけに、奥さんは苦労されたと推察する。早世されたことはお気の毒であつた。

晩年、私も多忙になり、研究の興味の方向も変わり、西本さんのそれとはずれができ、お付き合いは少なくなった。し

かし、時々夜に電話があり、いつも長電話であつた。後ろの雑音から察して、居酒屋からのようであつた。私のわからない問題をぶっつけてこられて苦笑し、私の手におえないと申し上げることもたびたびであつた。私が胃の手術で名大病院に入院したときは何度かお見舞いにきてくださった。気をつかわせまいと、碁会所へ行く途中でと断りながら、結局貝殻の話をしていかれた。

西本さんは瑞浪の空に突然現れ、輝いた彗星のような人であつた。彼が瑞浪へ来られなかつたら、瑞浪層群産の化石、ひいては日本の新生代化石、特に軟体動物と板鰓類の研究は大きく変わっていたらう。直接・間接の影響を受けた人たちも多い。中にはすぐれた研究者に成長した人もある。表街道を歩いた人でなかつたので、気がつかれない側面が多いが、高く評価できることである。

彗星は空の彼方に去って帰らず、寂しい思いが残る。来世でお目にかかることがあれば、西本さん、なにをしましょうか。お酒を酌み交わすことはぜつたいにありますね。マージャンは私が弱いから相手にならないか。また化石の話になるんですかね。もう十分にやったから、地質や古生物のことはやめにして、植物や魚など、生きもののことを、しかも美味しく食べられるもの話でもしませんか。

ご冥福を祈ります。合掌。

2004年9月25日

糸魚川淳二(名古屋大学名誉教授)